

# 帝国日本の文化権力：1910年代京城の能と謡\*

徐 禎 完\*\*

jsuh@hallym.ac.kr

## 〈 目 次 〉

I.はじめに	2. 京城の謡
II. 京城の能と謡	III. 文化権力としての謡
1. 京城と能	IV. むすび

Key word : 帝國日本(Imperial Japan), 文化権力(Cultural Power), 京城(Seoul, Keijyo, Kyungsung), 能(Noh), 謡(Utai), 植民地朝鮮(Colonial Chosun)

## I.はじめに

今日、日本の文化、その中でも取り分け伝統文化を代表する舞台芸術であり仮面劇として知られている能=能楽は、その成立当初より権力との関係を緊密に保ちながら発展してきたという歴史的経緯がある。即ち、足利義満、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった各時代を風靡した権力者を愛好者としながら、そしてパトロンとしながら社会的、時代的地位を確固たるものとしてきた。特に江戸時代には幕府が直接管理・管掌する式楽という謂わば宮中樂のような公的な地位まで得るに至り、土農工商という厳密な身分制度の下で能楽師は「士」に準じる待遇、つまり武士に準じる待遇

\* 이 논문은 2011년도 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 한림대학교 일본학연구소가 수행하는 중점연구소지원사업(NRF-413-2011-2-A00001)의 일환으로 이루어진 연구이다. 또한 이 논문은 2014년도 한림대학교 교비 학술연구비(HRF-201407-002)에 의하여 연구되었다.

\*\* 翰林大學校日本學科 教授, 能樂史・藝能史 專攻

を得るに至った。能楽師に対するこのような破格的な待遇は絶対権力であった幕府の様子を窺う各地方大名にも大きな影響を及ぼすこととなり、まるで競争でもするかのように各藩は専属の能楽師を抱えて育成しながら能を嗜むようになった。このように、江戸時代三百年以上を生き長らえた能の生命力には支配階層の教養であり娯楽であるという極めて強力な動力が作動していたのである。

一方、能は明治維新による旧習・旧慣の打破と西洋の新しい文物の導入という近代化の時流の前で存続の危機に瀕することになる。式楽として江戸幕府の保護を受けていたのであるが、その幕府が解体され明治新政府が出帆した状況下では能が自らの地位を保つべく保護膜を失ってしまったのである。一時は壊滅直前にまで追い込まれた能であったが、天皇家と華族そして高位官僚と知識人の保護と支援を受けることで能は再び立ち直るのである。そしてその背景には、西欧列強のオペラに該当する日本の国威を示すことのできる伝統芸能が必要であるという政治的・政策的選択があった。西洋の文物を積極的に受け入れた日本としては、西欧列強に対抗できる伝統があるということを示したかったのであり、さらには自らが熱心に受け入れた西洋の文物、制度、学問、技術ではない固有の文化と伝統というものにも大きな「力」があるということをも日本の権力者たちが悟ったのである。つまり、「文化の力」というものの存在を悟ったのである。

このようにして再興した日本の能は、教養・娯楽としての面以外に、主に外交舞台を中心とした場で「近代国家日本の偉観を表象する芸能」すなわち「国家芸能」として動員されるようになるが、その決定的なデビューを朝鮮で果たす。それは、1905年5月に今のソウル駅前広場で行われた京釜鉄道

- 
- 1) 明治天皇が明治11年の1878年に青山御所に能舞台を設置し数々の能を鑑賞することで能楽師に演能の場と希望を与え、欧米視察の際に西欧列強の芸術保護を実験した岩倉具視が華族による能の後援団体設立に向けて動き、1879年には訪日中だった元米国王大統領ユリシーズ・グラントを自邸に招いて能を上演させ、能楽社を設立し、芝能楽堂の建設を進めるなどの一連の展開を指す。現に当時はまだ「猿楽」という呼称が一般的だったが能楽社の発起人であった九条道孝らの発案で「猿楽」を「能楽」と改め、以降「能楽」と呼ばれることになる。明治維新後、多くの芸能が絶えたなか、「猿楽」は「能楽」という新たな名称と共に生き長らえたのである。

開通式典での能公演だった<sup>2)</sup>。日本海軍がロシアのバルチック艦隊を撃破する直前の出来事であり、京城に統監府が設置された年のことである。日本にとっては、京城と釜山を鉄道でつなぐことによって、日本から京城までの物流・補給線の確保が実現し、朝鮮における対ロシア牽制に優位な立場を占めるようになった快挙であり、能にとっては正に国家的快挙の場で国家芸能として華やかなデビューを果たしたという出来事だったのである<sup>3)</sup>。

本研究は、権力と緊密な距離を維持しながら明治維新という変革を克服することで近代に進入し<sup>4)</sup>、その近代という時代の中で「国家芸能」として再興した伝統芸能である能と謡が帝国日本の文化権力として植民地朝鮮の京城でどのような展開を見せるのかを探究することを目的とする。この研究は、帝国の文化が植民地でどのように受け入れられ、どのような役割を担うようになったのか、すなわち植民地という空間で文化と権力が織り成す動態を具体的に究明する作業の一環として位置する。また、さらには在朝鮮特に在京城日本人社会の一断面を能と謡という切込みによって把握する作業にもなるであろう。

ただし、今回の拙稿のみで京城の能と謡に関する問題を全て扱うことは無理なので、ここでは資料的に追跡可能な1900年頃から1910年代つまり1919年までの期間に絞ることにする。1919年を区切りとする理由は、植民

2) この問題に関しては『植民地朝鮮と帝国日本—民族・都市・文化』(アジア遊學138, 徐禎完・増尾伸一郎, 勉誠出版, 2010)に収録された拙稿「植民地朝鮮における能—京釜鐵道開通式典における『國家藝能』能」で指摘した。また、韓国語版の修正補完版である「식민지 조선과 노(能): 경부철도개통식전에서 공연된 ‘국가예능’ 노」は翰林大学校日本学研究所の日本学研究叢書1『제국일본의 문화권력』(서정완, 임성모, 송석원, 소화, 2011)に収録されている。

3) では、当時の朝鮮の民衆にとって能とは何であったのか、どのように受け止めたのかに関しては拙稿「植民地朝鮮における能—京釜鐵道開通式典における『國家藝能』能」にて指摘したように、「楽しむ芸能」としての意味はなく、「狂言は割合に能く解った」というものだった。つまり、「日本語が分からず、日本の歴史や文化に関する知識のない京城の朝鮮人が一条天皇の命を受けて御剣を打つ『小鍛冶』や盲御前に仕立てて曾我兄弟の仇討ちの物語を謡わせ芸尽くしのうちに仇討ちをする『望月』、あるいは『田村』や『八島』を理解できるはずがない」のである。一方通行だった。

4) 管見の限りでは、明治維新後、最初の動員された演能は明治2年(1869年)にイギリス王子エディンバラ公アルフレッドの来日した際のものであった。(『明治の能楽(一)』, p3~p4)

地統治10年という一区切りという意味もちろんあるが、これにはもう少し積極的な理由がある。その一つは、1919年の3.1独立運動である。この運動の結果、植民権力の統治態度に少なからぬ変化が生じる。二つ目は、1923年の関東大震災である。この震災の際罪のない朝鮮人に対する虐殺と民族的差別が大きく台頭するという背景がある。三つ目は1919年までの日本は第一次世界大戦の特需景気によって製造業や海運業が好況を迎え、輸出の拡大で赤字国家から黒字国家へと転じるが、1920年代はこのような好景気に対する反動によって恐慌が到来し21の銀行が休業状態になり、その後の1927年の金融恐慌によって経済的に極めて困窮した状況に追い込まれる。1919年が一つのターニングポイントになっているのである。さらにはその一方で、都市部では大正デモクラシーということばに象徴されるように、一般大衆が選挙権を要求するなどの民権運動が活発に展開される時期であった点も一つの理由となる。以上、1919年を区切りとする理由である。

## II. 京城の能と謠

### 1. 京城と能

能と謠というある意味では最も日本的な伝統芸能という視点から植民地空間で文化と権力が織り成す動態を探求し、そこに帝国日本の文化権力の一様相を見出そうとする本研究の先行研究は皆無に等しい。その背景には、近代能楽史研究が前近代の研究と比べると著しく遅れており、特に戦時期に対しては殆ど語られていないという研究の現住所がある<sup>5)</sup>。戦時期の能楽史が語られていないので、植民地空間における能・謠研究もまた語られていないのは必至である。さらにこのような状況を追討ちするように、資料的にも追跡が困難である。例えば朝鮮総督府の刊行物に能や謠を

5) この問題に関しては、拙稿「総力戦体制下における芸能統制：能楽における技芸者証とその意味を中心に」(『外國學研究』第25輯、中央大學校外國學研究所、2013)で詳細に指摘した。

扱ったものは未だ管見に入らない。満洲の場合は『満洲年鑑』に「謡曲は邦楽中最も高尚で且つ研究し易い為め、上中流の家庭を通じ古くより広く流行して居る」の一文から説明が始まり、満洲における主要謡曲団体として観世流では観世倶楽部、壺泉会、観正会、大連観世会、観水会、万葉会、高砂会、正諷会などがあるとし、さらに宝生流、喜多流、福王流、梅若流まで言及する概観が載っている(1933年版)。ところが、『朝鮮年鑑』には能・謡関連記事が全くない、といった具合である。

このような情況の中で、早い時期の能・謡関連記事として現れるのが、前述した京釜鉄道開通式典能である。この京釜鉄道開通式典能であるが、拙稿(2010)で未使用の資料を中心に若干補足すると、次に示す如く、その規模は「京城空前の盛儀」であったようである。

#### 京釜鉄道開通式 二十五日京城特派員発

午前九時より停車場構内にて花火を連発し同十時來賓一同南大門外の式場に参集。十五分奏楽を始む。博恭王殿下義陽君殿下は馬車に御同乗御來場あり。(中略)博恭王殿下義陽君殿下の令旨あり。次で古市総裁の奉答、米国公使アーレン氏の演説、大浦通相、農商工部大臣朴齋純、貴族院議員総代柳原伯爵、衆議院議員総代江原素六氏等の祝辞あり。(中略)席に列するもの千二百名にして内貴族院議員三十名、衆議院議員百余名あり。京城空前の盛儀なり。

(『朝日新聞』1905.05.27. 朝刊)

義陽君とは朝鮮王朝後期の文臣であり王族である李載覺(1874～1935)のことであり、『高宗』45巻1905年5月25日の三番目の記事に「京釜鉄道開通式時、日本國博恭王参席、命義陽君李載覺同参」とあることから李載覺の京釜鉄道開通式典への参席は高宗の命によるものであったようである。李載覺は、これに先立つ1905年4月13日に日比谷の三井倶楽部で「朝鮮国戦争祝捷之大使義陽殿下馳走能楽」という外交的接待の場に臨み、ここで能楽を観ている。『梅若実日記』の1905年4月13日の条に「朝鮮国よりの大使義陽殿下日比谷三井倶楽部へ馳走ニ三井一家ニテ招待能楽有之」とあり、橋弁慶・土蜘蛛と膏藥煉などの狂言が演じられた記録がある。同10日の条に「朝鮮国大使義

陽殿下 李裁覺殿下へ馳走の能来ル十三日ト呉大五郎より電話」とあり、さらに同11日の条に「朝鮮国戦争祝捷之大使義陽殿下 李裁覺殿下へ三井ニテ馳走ノ能楽弥来ル十三日夕六時橋弁慶土蜘蛛極」とあることから、日露戦争祝捷つまり日露戦争中の奉天会戦の戦勝祝いのための特使であったのである<sup>6)</sup>。このような極めて政治的な場に「朝鮮国よりの大使義陽殿下」が「朝鮮国戦争祝捷之大使」として臨席しており、その場に能があったのである。また、このことに関しては、『高宗』45巻、1905年3月16日一番目の記事に「詔曰：“命義陽君李載覺爲特派大使 使之前往日本國，祝賀戰捷。【本月十日，日俄兩軍會戰於奉天附近，日軍獲大捷，戰局全決矣。】」とあり、大韓帝国側の資料からも確認ができる。

この「京城空前の盛儀」の様は、博恭王と義陽君を筆頭に貴族院議員の約1/4にあたる30名の貴族議員と衆議院議員の約半数に及ぶ百余名の衆議院議員が参席している事実からも感得できるほど国を挙げての大規模なセレモニーなのであるが<sup>7)</sup>、この重要な式典での能楽に対して次のような興味深い解釈が紙上に掲載されている。

### 京釜鉄道開通式雑観

式場の内外諸所に設けられて場外の相撲や韓妓の踊は公衆一般の観覧に任したが、場内のは東京の太神楽と能楽。式場の建物は即ち能楽堂。紅白ダンダラの幕を撤すれば芝居という居所代り其儘能舞台となった。第一番に片山九郎三郎の「八島」。武士道発展の今日に好題目というてよかろう。次は葉山千五郎の「井かつちり」。盲の集会に出掛ける途次とは少々差合の気味なきにあらねど川の徒涉りは朝鮮趣味なるべし。次の観世清廉の「羽衣」まことや霓裳羽衣の曲、此式典に無くてはならぬ。次は茂山忠三郎の「太刀奪」。国家の経営他に取られぬ用心肝要。最後は大西亮太郎の「小鍛冶」。名刀ならぬ鉄道の竣成、宗近ならでも感謝すべく

- 
- 6) この他にも、1904.3.20~3.21に観世清廉宅での献金能に「本日朝鮮の公使見物ニ参ル」の記録があり、1906.12.10には古市公威宅にて朝鮮特公使馳走能が催され、その場に伊藤統監と佐藤進等同席した記録がある。
- 7) 次の記事からも京城までの道のりが大変になるほどの大規模な式典であったことがわかる。「大阪商船会社の義州丸は本日京釜鉄道開通式列席者を乗せ釜山に向う。乗船者非常に多く一二の申込みに残れたる両院議員は三等に入るの有様にて中には乗船出来ざる向もありと」(「朝日新聞」1905.05.22朝刊)

南山の松風颯々として千秋万歳と祝い納めた。言うなかれ古市氏が総裁なるが故に特に能楽を催せりと。高雅莊重なる日本固有の歌舞、此の如きものあるを韓人に示すも亦対韓策の一端でなあるうか。來賓中の幾多の韓人果して何をか見つる。欧米人は男女とも最終まで左も樂げに觀覽して独り狂言の滑稽に打笑めるのみならず能其ものにも痛く興するさまであった。

(「朝日新聞」1910.06.03.、下線は引用者による、以下同)

修羅能「八島」に武士道を賛美し、「羽衣」に華麗な舞を伴う目出度き祝言を求め、「太刀奪」に国家経営を他に取られぬ用心を銘じ、「小鍛冶」に名刀ならぬ鉄道の竣成を讃えながら、帝国日本の榮華を唱えているのである。さらには「高雅莊重なる日本固有の歌舞」を韓人に見せることで、帝国日本の偉觀を誇示するという優越感が感得できる。「韓人果して何をか見つる」と言い放っているのである。これは拙稿(2010)で指摘した「鉄道時報」の木下生なる記者が言い放った「韓国に於ける我が国威の発展」に他ならない<sup>8)</sup>。「高雅莊重なる日本固有の」能を以て国威を示す、ここに国家を代表する芸能という表象のプロトタイプが完成するのである。

ところで、管見の限りでは、帝国日本が敗戦によって崩壊するまで、京城で能の公演が行われたのは、計三度である<sup>9)</sup>。

- ① 1905 京釜鉄道開通式典
- ② 1910 国諷会主催能
- ③ 1935 鮮滿支各地演能 (宝生流による関東軍慰問能が主な目的)

この三度の公演は、偶然かもしれないが、1905年は統監府設置、1910年

- 
- 8) 觀世清廉一行による1905年5月25日の京釜鉄道開通式典能を無事終えた翌日の5月26日には同じく南大門広場で觀世清廉と古市公威による慈善会能催される。そしてその帰途、釜山でも能を披露するのであるが、5月28日に釜山商船倉庫で行われた義勇艦隊寄付能である。「義勇艦隊寄付能」とは、演能の収益を海軍に寄付するということで、日本海軍の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を撃破したことを受けてのことであろう。5月27日第1・第2戦艦隊が実質的に消滅しており、残るは第3戦艦隊のみとなっていた。
  - 9) 1915年10月30日と31日に金沢の佐野吉之助等による能樂大会が京城有樂館で催されている。これは朝鮮物産共進會觀覽のため京城を訪れる佐野一行に京城能樂會が交渉して実現した能樂大会であり、朝鮮での能公演を目的に渡韓する他の場合とは事情が異なるのでここでは数えなかった。

は併合、1935年は関東軍による満州事変を経て華北工作などで日中戦争へと向かう中間地点と、何れも歴史的展開と関わりのある時期に行われている。

国謡会は、1906年に泉秋花なる人物が大阪で能・謡曲普及のために創設した会で、雑誌『国謡』はその機関紙である。国謡会の長は、特定の流儀や地方に限定せずに広く能・謡を普及させようとした点であるが、1910年には東京にも事務所を開き、東京と大阪の二大都市を拠点とする全国規模の会に発展させようとした。『国謡』(1910.2)に掲載された社告によると、東京事務所は東京市麴町区飯田町三丁目十番地で、名古屋以西を大阪国謡社の管轄とし、以東を東京国謡社の管轄地として雑誌配付を含めたその他一切の事務を分担させたようである。

この国謡会が右の社告(1910.10)でのように朝鮮での能公演を企画するのであるが、このような企画を決意するに至った動機は、泉秋花が朝鮮に渡った折に「斯道の状況視察に趣いた際、同地の人々から是非能を見せて貰ひ度いが誰も思ひ切つてその一行を招くだけの力を尽す人が

無いから貴会の方で」と云はれたのが大きかったらしい。さらには泉祐三郎なる者による今様能狂言というものが京城に渡つてきては流行ったのだが、これが「三味線入りの能狂言」というまがい物だったので、「是は何とかして真の能楽を見せ度いといふ観念を禁じ得なかつた」という能狂言に対するプライドのようなものが泉秋花を動かしたようである<sup>10)</sup>。もちろん、観

社告

朝鮮及關門附近の斯道  
愛好家諸氏に謹告

我社の主義として且は能樂道普及奨励のため平生親しく能樂の  
觀覽を志し能はざる遠隔の地の愛好家のために一大能樂會の  
開催をなし諸氏が満足の際を耳にせんことを欲すこと近き  
例に於ても神戸に於ける觀、寶、金、喜四流の能樂會、大阪  
に於ける梅若氏兄弟招期の空前なる大能樂會に見るも明らかな  
るが尙我輩は是を以て是を是と事足れりとするに非ざれば連年掉  
尾の大事業として完全なる一大能樂會を組織し在留諸氏が  
懇望せられつゝありし朝鮮に於て二箇所(或  
は三箇所)又門司(若くは下関)に於て能樂の開  
催を實行することに決したる時機は来る十一月二十七日(第  
四日曜日)より十二月四日(第一日曜日)に掛け行ふものにして  
その順序は未定なるが阿幸愛護家諸氏は本會の意のあるところ  
を諒し御達成の上御遊覧の先を問ひたく此段謹告す

東京 大阪 國 謡 社

10) 前掲の社告に次ぎ『国謡』1910年11月号では二頁にわたる社告を載せているが、ここでは「前号予告の如く我社は愈々左の能樂師諸氏を聘し二十五日出発、下関、釜山、京城の三箇所に於て一大能樂會を挙行し愛好家諸氏の御宿望を達せしむる事と間成候」と述べながら、大江又三郎、中村猪八郎、茂山千五郎などの出演者の名前、下関、



世清廉と古市公威による1905年の京釜鉄道開通式典能のことを意識はしていたようである。「最も朝鮮は彼の古市公威氏が在韓の折京釜鉄道開通式の余興として数千円を投げ能楽の催しが出来た事はあつたが其頃は未だ謡の趣味を持つて居る人などは殆ど皆無といつてもよかつたので、素より今日のように泰正と成つて居つた訳ではなし」と説明しながら、「今回の如くは全く斯道を益々発展させんと計画の下にその趣味を以て迎へる人の為に」と、今回の自分たちの催能こそが斯道の発展という明確な目的をもつての公演であるという自負心と競争心を示している<sup>11)</sup>。

結局、併合から約3ヵ月後の1910年11月29日と12月1日には釜山で、12月4日と5日には京城での催能が実現する。このことは、1910年11月23日付の「京城日報」に記事化されている。

#### 万千閣上の能楽 十二月四日、五両日開催

近頃当地に於ける謡曲の流行は非常のものにて其の流派も一様ならざるが、如かも能楽師を有せざることとて未だ此の催しなかりしを遺憾とせりし同好の士は過般大阪にて発行する『国謡』能楽雑誌社主幹泉氏の来城せしを好機とし能楽開催の事を交渉したるやに聞き及び居りしが、今回愈々其の尽力にて、大阪に於ける斯道の大家喜多流の家元、観世の大江又三郎、脇師に高安の猪八郎、狂言師には茂山千五郎其の他の一行、二十五日大坂出発、二十七日下の関にて、二十九日及び十二月一日の両日釜山にて、二日着城、四日五日の両日旭町万千閣に開催する都合にて、同社理事松井碧水氏は先着し一切の準備を為し居れりと。

また、12月2日付の「京城日報」にも「大能楽会の番組」という題で「会費は一人金二円均一也」と共に詳細な番組まで紹介されている。「一人金二円」は決して安いとはいえない金額だが、興味深いのはこの国謡会主催能の記事が「毎日申報」(1910.11.23.)にも掲載されていることである。

釜山、京城での日程、番組、申込先まで明示している。一ヶ月の間に朝鮮行きの計画が相当具体化していることがわかる。

11) 引用はすべて「国謡」1911年1月号に掲載されている記事「朝鮮及下関の催能」による。

### 日本能樂の御覽

能樂은 日本에서 古來로부터 幽玄高尚한 者로 특히 世道人心에 至大한 裨益이 有한은 夙聞한 바어니와 今回에 日本國諷會의 主催로 喜多流, 觀世流의 各派의 家主가 入京하야 來月 三四日頃으로 爲期하고 德壽, 昌德 兩宮殿下의 御覽에 供한터인 디 目下 兩宮職과 交渉하는 中이라하니 若 此事를 舉行하기로 決定하면 朝鮮에서는 嚆矢인즉 其 盛況은 可히 推知할 事이라 候더라.<sup>12)</sup>

植民地期のハングル新聞に記事化されているということは朝鮮人読者を読み手と想定していたということになるが、これは頗る珍しい例といえる。ただし、広告費を負担してまで宣伝するほど朝鮮人能愛好者がいたと判断していたというよりは、国諷会の能への自負心が朝鮮人にも能を紹介して植民地朝鮮においても「斯道を益々発展させんと計画」であったと解すべきであろう。もちろん、多大な費用をかけての朝鮮公演である故に一人でも多く集客して収益を確保したいという現実的な必要性もあったであろう。

しかし、何よりも注目に値するのは、「德壽, 昌德 兩宮殿下의 御覽에 供」するということ、つまり「德壽と昌慶の兩宮の殿下に御覽を供する」という部分である。この件に関しては、注9で触れた「国諷」1910年11月の社告に次のような但書がある。

但京城に於ては三殿下の御上覽を仰ぐ予定なるを以て多少の変更あるやも知るべからず。委細同地の新聞紙に依て報道す。

下関、朝鮮釜山、同京城と、公演地と日程の次にこのような但書があるのであるが、この内容から朝鮮での催能を企画した段階で王覽をすすめるつもりであったことが分かる。恐らくは王覽を実現することによって、朝

12) 国諷会主催能を朝鮮における能公演の「嚆矢」と評しているが、京釜鉄道開通式典能が先である。「能樂は日本で古來より幽玄高尚なものとして特に世道人心に至大な裨益があると夙に聞いているが、今回日本の国諷会主催で喜多流、觀世流各派の家元が入京し、來月三日四日頃の予定で德壽と昌慶の兩宮の殿下に御覽を供するため目下兩宮職と交渉中であるというから、もし予定通り舉行されることに決定すれば、これは朝鮮における嚆矢となる故、その盛況は推知可能である。」

鮮の王まで日本の伝統芸能である能を堪能したという方向で能のすばらしさを誇示し、それはそのまま日本帝国の国威発揚へとつながり、と同時に一つのセンセーションを巻き起こして収益を確保するという計画ではなかったろうかと思われる。しかし、泉秋花のこのような目論見は実現しなかった。「国風」第06年第03月号(1911.03)に次のような告白がある。

余は直ちに宮内府に趣き小宮次官に面会し李王殿下に能楽を御覧に入れ度しと願出づ。次官は温厚なる人物にして直ちに快諾されたが総督府の次官と熟議の結果何分総督不在の折柄にもあり遂に図らい兼ねることと成って王覧は遂に沙汰止みと成った。

ここでいう小宮次官とは、李王職次官小宮三保松(1859～1935)のことである。小宮は1876年に司法省法学校正則科第2期生として入学し、卒業後1884年より司法省御用掛民事局詰で公職に就く。その後、欧州派遣司法官としては渡欧するが、伊藤博文に抜擢されて1890年9月から貴族院書記官となり、翌年6月には樞密院議長書記官を務めた。1892年8月には第一次伊藤内閣の内閣書記官に抜擢され、1907年9月に韓国宮内次官として統監であった伊藤博文の下に復帰し、李王職次官は併合後の1911年2月に就任している。三宅雪嶺が「書記官長は巳代治、秘書係に三保松と云うのがあり、妙に芸者の名前に似て居り、伊藤公を取り巻く芸者の如く」<sup>13)</sup>と記しているように、小宮は伊藤博文の寵愛を受けた側近であった。当時、李王職長官が閔丙奭で次官が小宮三保松なのであるが、泉秋花は李王職第二人者である小宮次官に面会して能の王覧を実現させようと努めたのであるが、生憎寺内は東京出張中で「総督不在」という理由から却下されたのである。

京城での王覧が実現しなかった今回の朝鮮公演について、泉秋花は以下のように自評している。

13) 三宅雪嶺『人物論』、千倉書房、1939。p299。なお、巳代治とは、伊東巳代治のことで、1889年に首相秘書官、1890年に貴族院議員勅撰、1892年に第二次伊藤内閣の書記官長、1898年には第三次伊藤内閣で農商務大臣を務めている。

### 大成功を納め得て無事帰着

今回の朝鮮催能といふものは前号にも記載の通り全く斯道の為を思つてしたことであるから素より莫大の費用を掛けて利益などを得やうとは露聊かも思はぬことであつたが喜多氏の支障等で我社に於ては甚大な損害を蒙つたものの、計画としては成功して余りある次第で、是がため朝鮮併合当年に一大歴史をつくり且斯道発展に大なる機会を与へたる等余は損をしても是程愉快なことはないではないかと社員にも語つたことであつた。

(『国諷』1911.3)

京釜鉄道開通式典能と国諷会主催能の最も大きな違いは、前者は国家をあげての大掛かりな式典での祝賀能であつたのに対して、後者は「斯道」の発展を願うという能楽愛好者としての志という側面もあつたものの基本的には興行であつたという点である。にも拘らず、国諷会主催能は、興行的に「甚大な損害を蒙つた」失敗だった。そして、泉秋花はその主因として「喜多氏の支障等」を挙げているが、これは前掲の「京城日報」(1910.11.23.)の記事に「大阪に於ける斯道の大家喜多流の家元」とある如く、当初の計画では喜多流の家元喜多六平太も出演するはずであつたが、結局喜多六平太が参加できなくなったことが集客の大きな支障となつたという意味である。もちろん、家元の不参加は興行上大きな痛手には違いないが、京城での王覽能が実現しなかつたことも話題を呼べなかつたという点で影響があつたであらう。

## 2. 京城の謡

能公演にはシテとワキはもちろん地謡まで揃えなければならないため大規模な公演団を組織する必要がある、専用の舞台まで必要とする。それ故に財政的負担も大きくなり容易には招致できないのが能である。京釜鉄道開通式典能が国家行事であり、国諷会主催能では「甚大な被害」を覚悟するしかなかつたことから分かる。一方の謡は能の詞章を対象とする声楽であり個人の芸能である。それ故に謡会も小規模の人的ネットワークとしての軽快さがある。つまり、国威や日本精神や日本の伝統芸能といった類の偉観を誇示する象徴性は能の方が優れているが、植民地空間における日本

人社会の箇々の構成員に容易に浸透し拡散するという面では謡がより効率的な特徴を持っている。このような謡であるが、京城の謡会はいつ頃から活動を始めており、その規模や状況はどの程度なのであろうか。この問いに接近するために、1910年前後の能謡関係の雑誌と新聞記事などを手がかりにその痕跡を追跡してみた。『謡曲界』は1914年、『宝生』は1922年、『観世』は1930年の刊行で、1910年前後に刊行されている能謡関係は『能楽』のみである。『能楽』は1902年刊行であるが、植民地での謡会の記録は1909年から確認できる。1909年に最初の謡会が結成されたのではなく、それ以前にも植民地各地の日本人社会で謡会が催されていたが、通信網などの植民地とのネットワークが構築され『能楽』が植民地の消息を定期的に載せ始めたのが1909年と理解すべきであろう。

以下、1910年までの植民地あるいは租借地における謡会の状況をまとめた。1910年までとしたのは大韓帝国併合前のいつの頃から京城で謡会が始まったのかを調べるのが目的であるからであり、台北や大連などを含めたのは京城の状況を相対的に把握するためである。もちろん、この表に収めた記録が全てとは言えず、今後の調査によってさらなる謡会の記録が追加される可能性があることを付言しておく。

日時	場所	謡會名・行事名
1905.05	京城/釜山	京釜鐵道開通式典能*
1909.01	台北	喜謡会俱樂部にて年賀祝詞謡初め
	台北	同俱樂部新年会
	台北	淡水港支部新年会
	嘉義	宝生流安富元光氏を聘し嘉義城内富士野屋楼上にて謡会
1909.03	釜山	守谷旅館にて釜山宝生会の藤氏送別謡会(宝生・喜多合同)
1909.05	清国大連	乃木町俱樂部にて観世会第10回例会
1909.06	京城	五雲会、倭城台本願寺別院にて
1909.07	清国大連	乃木町俱樂部にて観世会第13回例会
	京城	五雲会、倭城台本願寺別院にて
	嘉義	安富元光氏渡台後勢力を増し7月25日東門外本願寺にて謡会

1909.08	釜山	高野山に於いて釜山宝生会素謡会
	清国大連	乃木町倶楽部にて観世会第14回例会
1909.09	京城	三田別宅にて観世流雨声会蛙声会共謡会合同
	京城	倭城台本願寺別院開会
	嘉義	東門外本願寺にて月並会
1909.10	釜山	松涛庵にて宝生会素謡会
1909.11	台北	観世流有志荒井春治園遊会余興として半能
	京城	南山和楽園にて観世流素謡
	台北	喜多流主催能謡会
1909.12	台北	喜多流主催能謡会
	京城	京城観世会、京城婦人会会場
1910.01	京城	京城五雲会
	京城	観世会新年謡会
1910.02	台北	奉納能楽 円山忠魂堂堂内円山臨濟寺豊川稲荷神社
	台北	素謡会、倶楽部にて
	台北	淡水支部
	澎湖島	澎声会
	京城	京城観世会、京城婦人会会場
	台北	喜謡倶楽部例会
	台北	喜多流淡水支部
	京城/釜山	国謡会主催能*
1910.03	京城	京城五雲会
	京城	京城観世会
1910.04	京城	京城観世会
	京城	京城五雲会
	台湾	高砂会(当地各流聯合会)、4月17日に新起街魚魚にて開会
1910.05	京城	京城観世会
	京城	京城五雲会
	澎湖島	澎声会
1910.06	釜山	釜山謡曲各流合同舞台開祝会(敷舞台新調)
	京城	京城観世会
	京城	京城五雲会
1910.07	京城	京城観世会 第9回素謡月次会
	京城	京城五雲会 第43回謡会

1910.09	京城	京城観世会 半歌仙謡会
1910.10	京城	京城観世会 第11回素謡会
	京城	京城五雲会 第45回謡会
	清国漢口	喜多流素謡会
	台北	豊川稲荷神社奉納能楽(喜多流)
	台北	喜多徳例会素謡
1910.11	台北	喜多秋季謡曲大会
	京城	京城観世会 素謡大会
	大連	大連素謡会通常記念例会

【表 1】1910年までの朝鮮・台湾・大連等地における謡会の記録

この表から次のような指摘が可能である。①京城では五雲会と観世会が早い時期から活動を始めているが、1910年7月の会を以て五雲会が第43回目の会で観世会が9回目の会であることを逆算すると、月次会であることから、五雲会は1906年1月発足となり、観世会は1909年11月発足ということになる。五雲会の創設は統監府設置によって派遣された官僚などを中心に謡会の需要が生じたものと思われる。②植民地としての歴史が長い分、謡会の活動も台北が京城より盛行しており、台北では喜多流の活動が活発であった。③「清国大連」でも謡会が行われているが、さらなる精査が必要であるが、恐らく1906年から活動を始めた南満州鉄道株式会社の存在が大きかったものと思われる。現に1909年7月の会が第13回例会とあるので、逆算すると1908年7月結成となり、その蓋然性は高い。

すなわち、日本の植民地主義と軍国主義によって権力が周辺国・周辺地域に上陸すると、そこに支配者としての日本人社会が形成される。するとそこに本国の文化が日本人社会に移植され形成される。そして、被支配者側にはそれは権力集団の文化ということになる。その中心に能があり、謡曲があった。この表は、このようなことを物語っているのであるが、こう見ると、1905年の京釜鉄道開通式典での能公演は、植民地における最初の能公演であっただけではなく、京城の日本人社会に謡や能舞台への憧憬を植え付けた刺激であったとも言えそうである。

興味深い記事が1916年1月10日付の「京城日報」が掲載されている。

**謡ひ初めの六百人** 初春は賑う京城の謡曲界 仕舞と袴能＝女流の謡ひ手

京城に於ける謡曲の流行は実に素晴らしい位だ。就中中流階級以上の方面に多数を占めている。京城で謡曲の趣味が一般に理解されて来たのは三四年前からだが盛んになり出したのは漸く此の一二年、即ち一昨年を終りから昨年にかけてである。昨年辺りから仕舞や袴能さえ試みるに至ったのは大した勢というの外はない。これが進んで能狂言の流行となり能舞台の建設などの好者の間に企てられるのも敢て遠い事ではあるまいとも思われる。目下京城市中に門戸を張って師匠の看板を掲げている人は十人近くある。流派からいうとどうしも観世が第一で次ぎが宝生、喜多という順である。謡会の如きも観世流では松齡会・松風会・楽声会・観世会京城支部、宝生流では鶴翼会・松雪会、喜多流では喜多会支部などがある。此等の会では大抵月並会を開いて居り観世流の四会の如きは春秋の二期には連合大会を開いて公開的にやっているが、唯内輪的に月々素謡会などを催している会もある。十人近くの師匠は尠なくも二三十人、多い人になると六七十人のお弟子のあるものもあるそうだ。師匠連の話によると今京城に謡の出来る人がザッと六百人ばかりある。その内の六分が観世流で四分が宝生流だという。金春・金剛は個人としては多少やる人はあるかも知れぬが教授所はない。(以下略)

「盛ん」の基準は明確ではないが、京城での謡曲は「中流階級以上の方面」を中心に1914年後半から大きく流行り、この勢いだと能舞台建設も遠い夢ではないというのである。実際に当時の京城謡曲界では能舞台建設が宿願であつたらしく「今少し真剣の態度を以て斯道の研究に莅み、将来は能舞台の一つも建設して、時々囃子や能の催さるるに至る気運を作る位の意気込みでやって貰い度いものである」<sup>14)</sup>といった発言が散見される。そしてこの京城で師匠の看板を掲げているのは10人近くおり謡人口は約600名で、流派は観世・宝生・喜多の順で多く金春と金剛は教え手がいないという。観世・宝生・喜多は内地の宗家から師範を派遣して流派の勢力拡大に励んでいるが金春と金剛にはそれが無いということである。実際に当時の謡会の活動を調べても金春と金剛は見当たらない。このような謡曲の盛況は京釜

14) 「京城日報」1916年11月7付の記事「宝生会を聞くの記」。なお、管見の限りでは京城に常設の能舞台が建設されることがなかった。京城公会堂に組立式の舞台を備え各流派共同で使用していた。



鉄道開通式典から約10年の時点であり、その間「併合」によって在京城日本人社会の位相が大きく変わったことが背景となった文化の動態と云えよう。もちろん「娯楽機関に乏しい京城の様などころでは此の頃一般に流行している謡曲又は仕舞の如きものは家庭に於ける健全なる娯楽として大に歓迎すべきものであらうと思ひます」<sup>15)</sup>といったことも導因としてあつたであらう。その一方で、朝鮮総督府始政七周年の記念祝祭会が龍山の総督官邸で催された際に庭園に舞台を拵えて能狂言を行うなど、能が帝国あるいは植民権力の偉観を表象する国家芸能として動員される権力と芸能の距離には変動がなかつた<sup>16)</sup>。

もう一つ、1910年代の京城謡曲界の状況を知る手がかりに謡本の問題がある。

#### 謡曲本の売行 よく出るのは羽衣、紅葉狩

京城で売れる謡曲本の事をお訊きになるのでございますか。御覧の通り謡曲には二百十番の種類がありましてこれに観世、宝生、喜多、金春、金剛の諸流に別れますので品数は随分沢山に揃えなければ成りません。本は紙数が多くても少くても總て十一銭均一で売って居りますが、何分にも京城だけで六七百人のお客様を相手の商売ですから、余り沢山は売れませぬ。先ず各流共初歩のお方が御稽古なさるのは鶴亀、猩々、竹生島の順序ですが、一番よく出るのは羽衣、紅葉狩のございましょう。又その中で一番売れ悪いのは九番物、十番物の鉢木、隅田川、石橋、道成寺などの習い物でございましょう。また各流の順序から申せば観世が一番で次ぎが宝生、喜多の順となり、金春、金剛などは頓と売れ悪うございませぬ。(中略)南山町の中川静松堂

これは「京城日報」1916年1月15日付の記事であるが、京城謡曲界の人口が600から700名なので謡本の売上げはあまり期待できず、紙数に関係なく11銭均一販売しているという。1917年に銀座木村屋のあんパンが2銭でコンサイス英和辞典1円30銭、1918年に映画が20銭であり<sup>17)</sup>、1916年以降物価が高

15) 「京城日報」1916年8月22日付の記事「行儀が良くなる少女の謡」

16) 「京城日報」1917年10月2日付の記事「始政七年記念祝宴」

17) 週間朝日編集部(1988)『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社

騰していることを考えると謡本一冊11銭というのは決して安いとは言えない。ところで、この記事は南山町の中川静松堂なる書店の主人を取材しているのであるが、興味深いのは、26年後の1942年にもこの書店の存在が確認できる点である。『謡曲界』1942年5月号及び6月号に「謹告日配特定能楽書配給所設置に就いて」という告知文が「能楽図書出版協会」名義で掲載されているが、その内容は「今般日本出版配給会社の指令により当協会の推薦を以て下記各店は一般小売業務の外能楽書特定配給所として同社の卸業務を代行致すことと相成候間ここに謹告仕候」とある。つまり、総力戦体制の下で文化統制の一環として情報局が全国の出版取次業者を統合して1941年に設立したのが日本出版配給株式会社である。梅若を含め五流の謡本はもちろんのこと「其他能楽関係図書一切」は、特定配給所に指定された14の書店を通してのみ扱うというのである。この14の特定配給所は、東京5、名古屋2、大阪2、京都1、金沢1、札幌1、神戸1、そして京城に1ヶ所なのであるが、それが今のソウルの地下鉄4号線の明洞駅1番出口の南山初等学校付近となる「京城府南山町三丁目」の「中川静松堂」なのである。開店時期は未詳だが、30年以上京城で謡本を供給したことになる。

外地で唯一の謡本配給が許された特定配給所が京城にあったということは、帝国の本体に最も近い植民地であり大陸進出のための橋頭堡であった朝鮮とその首府京城という地政学的意味も含めて、帝国日本の文化権力という問題を考えるうえで一つの指標になるであろう。

### Ⅲ. 文化権力としての謡

ところで、朝鮮王による王覽能、正確には大韓帝国皇帝の御覽能は結局は実現しなかったのか。この問題に関して、現在までの調査ではそのような痕跡は確認できていないが、国諷会による王覽能試みから8年後の1918年1月20日付の「京城日報」に徳寿宮石造殿で謡会が催された記事が確認できる。

### 余興に謡曲会 王世子は極めて謡曲に御堪能

李王世子殿下の御勸めにより二十日徳寿宮石造殿に於て李太王、李王同妃殿下の日本料理御試食午餐会あるべき由は既報した。当日右内宴終了後余興として謡曲会の御催しある由元来王世子には東京に於て折々宮内省に催さるゝ能楽及び謡曲の御会合に臨まるゝ事あり別て謡曲は極めて御堪能の御事とて特に純日本料理の御饗応の外謡曲をも御聴かせ申し度しとのご希望に出でしものと承われるが当日の番組は左の如し。

田村	松田耕作		
(事務官)	末松熊彦	金 深雪	
羽衣	松田耕作		山中
(次官)	国■象■郎	金 深雪	梅塘
鞍馬	松田耕作		山中
(御用掛)	武田尚	金 深雪	梅塘

右の松田耕作氏は元仁川水道事務所長、金深雪女史は東京に産れし婦人にして祭祀課長事務官金東完氏の夫人たり。又山中梅塘氏は東京松風会の師範役にして偶々京城に來りしを機会に今回特に■招ありし次第なり。而して右の地謡は山中氏及び金事務官、小山典医之を勤むべし■いふ。猶ほ前記番組は三番とも笛を除き太鼓及び小鼓大鼓の三拍子を入れ前記の如く太鼓は松田氏、■鼓は金夫人勤むべき由なり。(紙面状態が極めて悪く判読不可能は文字は■で表示した)

王世子李垠の勸めによって太王である高宗と純宗、そして同王妃が同席する形で徳寿宮石造殿で日本料理試食の午餐会があったが、宴終了後に余興として謡曲会が催されたという記事である。王世子は東京の別邸滞在中に日本料理のみならず能楽や謡曲にも接する機会が多々あってか「御堪能の御事」と表現している。番組は「田村」「羽衣」「鞍馬天狗」の三番で、修羅物・祝言物・五番目物の構成である。天女の舞をみせる優雅な曲「羽衣」、清水寺の來歴を尋ねる旅僧に坂上田村麿が建立したことを語る少年が実は田村麿の化身であったという「田村」、そして牛若丸伝承から取材し牛若丸(子方)が登場する「鞍馬天狗」、これらの選曲は王世子李垠の趣向に合わせたものなのであろうか。ただ、何れにしても日本の古典文芸に対する造詣がなければ曲の理解は期待できないことを考えると王世子李垠は日本の古典文芸

に対して相当の知識を持っていたことになる。それ故の「御堪能の御事」なのであろう。一方、この催しに関して、1918年の記録を収める『純宗実録附録』には京城での日程を終えて王世子が東京の別邸に戻る等の記事は確認できるが、当日のことに関しては残念ながら記録がない。

ところで、謡を担当している面々を見ると、元仁川水道事務所長松田耕作、小山典医と東京松風会師範役の山中梅塘、それから李王職からは徳寿宮事務官国分象太郎<sup>18)</sup>、掌苑課長末松熊彦<sup>19)</sup>、祭祀課長事務官金東完と金深雪婦人、御用掛武田尚などが参加している。王覽であったという点を十分勘案しても、前掲「京城日報」の「中流階級以上の方面に多数を占めている」の如く、植民地朝鮮で謡を嗜む階層の社会的地位を示す興味深い例である。

当然のことながら李王職の官僚もこの「中流階級以上」に含まれるのであるが、ここで注目したいのは、李王職の官僚の多くが謡を嗜んでいるということではなく、朝鮮人官僚金東完という人物が謡の達人であったという事実である。石造殿での謡会で金東完事務官は山中梅塘と小山典医と共に地謡を担当しているが、詞章が全て古文である謡曲を理解できるほど日本の古典文芸に対する教養と知識のある「中流階級以上」の人が嗜んでいた能・謡曲を植民地朝鮮の地で朝鮮人が日本人を凌駕する実力を有していたという事実は当時の京城謡曲界でも驚きであったようである。1916年1月10日の「京城日報」では金東完に関して次のように賞賛している。

異彩を放って居るのは李王職事務官の金東完氏だ。朝鮮人で謡いに趣味を有つという事が已に奇抜なところへ熱心と練習の効というものは恐ろしいもので却っていい加減な内地人より余程確かな技倆を有していて鮮人間に謡いの趣味を説いて廻る第一人だとの事である。

- 
- 18) 「李王職次官 国■象■郎」は「徳寿宮事務官 國分象太郎」であろう。國分象太郎は、統監府書記官、統監秘書官を経て併合の際李王職事務官に任じられている。従四位勲二等。
- 19) 掌苑課長の末松熊彦は、1892年に東洋英和学校卒業後米国シカゴ商業学校で留学し、1904仁川米豆取引所支配人、1908年宮内府嘱託・宮内府事務官、1911年に李王職事務官となる。正七位。

金東完は内地人を凌駕する技量の持ち主で朝鮮人に謡の趣味を説き広めようとしているとの高評価である。1918年1月5日の記事でも「尤も評判の高いのは金東完氏で目下朝鮮第一を以て任じて居る、何に朝鮮人に謡の真髓が判かる者かと貶なす人も多いが月謝の廉い為めか習って居る向きもある」と評している。この評価には、朝鮮人に日本文化の真髓である謡が理解できるはずがないという日本人としての優越感と朝鮮人に対する蔑視と、にも拘らず最も評判の高い金東完は月謝も安いので彼に謡を習っている連中もいるという最高の称賛とが混在している。

このように日本の伝統芸能である謡において異彩を放つ金東完であるが、彼の足跡を追跡してみると、宮内府大臣秘書官時代の足跡が『純宗実録』に多数確認でき、李王職事務官時代の記録は『朝鮮総督府官報』に多数確認できる。1880年生まれ、1895年に官費留学生として日本に留学し、慶應義塾大学を経て東京帝国大学農科1905年に卒業している。1905年帰国と共に農商工部技師として公職に入り、その後忠清南道觀察道全義郡守を歴任する。1908年に宮内府大臣閔丙爽の日本派遣に随行したことがきっかけとなったようで、1909年に宮内府大臣秘書官に就いている。併合後の1911年2月からは李王職庶務係人事室事務官となり、1915年4月からは祭祀課長となり1917年4月まで庶務課長も兼任した。1918年4月依願免職。1919年には漢城銀行に入行して1920年に東大門支店支配人となる。同年12月には京城府学校組合の評議員となる。1924年に再度官職に復帰して京畿道富川郡守となる。1909年に日本政府より勲四等瑞宝章を、1912年に韓国併合記念章を、1915年に大正天皇即位記念大禮記念章を、1925年に勲三等瑞宝章を、1928年に昭和天皇即位記念大禮記念章を、1931年には従五位勲三等叙勲。なお、金東完は儒林を親日化するために伊藤博文から2万円の資金を得て李完用・趙重應が1907年に組織した大東学会で評議員として活動しており、韓相龍ら朝鮮の有力財界人が内鮮融和を目的に結成した朝鮮実業倶楽部でも活動し、1939年2月に京畿道富川志願兵後援会が結成された時会長となった。さらに同年11月には朝鮮総督府が戦時体制強化と儒道皇民化のために朝鮮の全儒林を動員して組織した朝鮮儒道連合会の評議員として活動している。

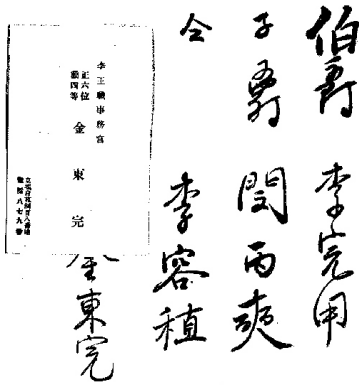
また、前掲の『京城日報』で「金深雪女史は東京に産れし婦人にして祭祀課長事務官金東完氏の夫人たり」とある金東完夫人は、旧姓は不明であるが、「琴に長けた才色兼備の日本人」<sup>20)</sup>だったという。1916年1月23日午前9時より寿町の松翠楼にて松風会素謡会の新年会が催されているが、番組に「鶴亀」と「巴」を担当した「金夫人」なる人物が確認されるがこの「金夫人」が「金深雪」なのであろう。

以上、官費留学生から一転して植民権力の官僚として華々しい経歴を有する金東完の経歴を概観したが、この金東完という人物を端的に表す資料がある。1916年10月21日付の「陪、拝観券交付者(海軍部外)」<sup>21)</sup>で、恒例の観艦式の拝観券を交付した名簿である。内容は以下の通りである。

伯爵 李完用 子爵 閔丙爽 同 李容植 (名刺) [李王職事務官] 金東完  
恒例観艦式拝観並拝観希望者別紙ノ通二者之

大正五年十月二十一日

大臣官内書記官 呉海軍中佐殿



周知の通り、李完用・閔丙爽・李容植は併合に積極的に加担し植民権力による統治にも積極的に協力した所謂「親日派」の代表的人物である。この3人に随行する形で名を連ね、名刺を残しているのであるが、上述の経歴を見ずとも植民地朝鮮における金東完という人物の位相がこの名簿から見て取れる。

植民権力の朝鮮人官僚と「日本精神の国粹」<sup>22)</sup>とされる謡曲、この権

20) 韓国・国史編纂委員会傘下の韓国歴史総合情報センターの韓国歴史情報統合システム [http://db.history.go.kr/item/level.do?sessionId=61DED7EC0B9713A2577C39CF545AF7D1?levelId=im\\_101\\_01371](http://db.history.go.kr/item/level.do?sessionId=61DED7EC0B9713A2577C39CF545AF7D1?levelId=im_101_01371)

21) 海軍省-公文備考-T5-16-1888(所蔵館：防衛省防衛研究所)、国立公文書館アジア歴史資料センター

力と芸能の異種の組合わせは一体何を意味するのか。朝鮮人でありながら植民権力の統治に参加する「植民権力の朝鮮人官僚」は社会的に身分的に、そして日本人をも凌駕する「日本精神の国粋とされる謡曲の達人」は文化的にそして精神的に、「朝鮮人」という殻を打ち破り「日本人」へと越境する一「植民地人」の姿を映し出す重要な指標となっている。社会的・ヒエラルキー的には権力体制の中枢に座し、文化的には日本の古典文芸に深い教養と知識を有する「植民地人」は優秀な「臣民」にはなれても決して「日本人」にはなれない運命であったが、越境の対象としての境界を形成する有力な文化的装置として能・謡曲が介在しているのである。植民地朝鮮における日本人社会は被支配民である朝鮮人社会の上位に位置するが、能や謡曲は日本人社会の中でも中流以上あるいは上流階層の一つのステータスでありプレステージである。つまり、植民権力に仕える官僚になることによって社会的には権力執行者として朝鮮人社会の上に立ち、そして謡を極めることによって文化的精神的に大半の日本人より上に立つことができたのである。ヒエラルキーのシンボルとして、越境のための有効な装置として能・謡曲が機能していたのである。ここに国家芸能とはまた異なる文化権力の動態が一つ確認できる。

#### IV. むすび

1910年代後半の帝国日本における謡曲の状況と認識に関して具体的な手がかりを提供してくれる資料の一つに1918年1月5日付の「京城日報」に掲載された「京城謡曲界の昨今」という記事がある。その冒頭で「近年内地中流の紳士淑女間に猛烈の勢を以て流行して来たのは謡曲で大正の今日謡の一番も知らぬ者はお話しにならぬ没趣味漢とされて来た」と、大正時代に

22) 能・謡を「日本精神の国粋」「日本の国粋」「日本精神の真髓」等とする表現は根強く、特に総力戦体制に入るとさらに頻繁になる。江戸時代武家の教養であり娯楽であった能・謡が近代を通じて日本を代表する芸能というイメージが創りあげられていく過程と見ることができる。

入って内地で上流中流層を中心に謡曲が大きく流行していることを述べた後で、植民地に関して次のように述べている。

台湾、朝鮮、満洲、樺太の各植民地も中々の勢で流行を追い今や謡曲全盛の時代に入った観がある。それは謡曲其のものが古典的な武士的な生粋の日本趣味である上に家庭にも社交にも最も能く適合し幾人でも連吟し同吟して共楽し得る特長があるからであろう。謡曲は日本の美術宗教文学芸術人情風俗の結晶物で之を知らぬ者は日本の国粋と真価を了解せぬ人である。

内地での謡の流行は台湾や朝鮮などの植民地にまで広がり、今では「謡曲全盛の時代」であるとまで言い放っているのであるが、その理由は、能・謡曲の本質は武士道的な生粋の日本趣味であり日本の文芸宗教などの結晶物で日本の国粋であるからというのである。コラム形式の新聞記事であるという点を差し引いても、当時、能や謡がどのような階層に滲透し、また能や謡をどのように捉えていたのかを端的に示しているといえる。能が近代国家日本の国威を表彰する国家芸能として復活したのであれば謡は内地や植民地日本人社会では娯楽・教養という部分を保ちながらステータスシンボルとして機能した。ところが植民地における支配者と被支配者という場面になるとステータスシンボルに止まらずヒエラルキー移動の一指標として機能するほどの力を持つようになったのである。これを文化または芸能の権力化といってもよからう。

本稿は能と謡を中心に帝国日本の文化権力を探求する研究の一環である。本稿で扱った内容は京城の能や謡の一部に過ぎず、京城で活動した謡会に関しては膨大な資料の整理を経て別の紙面で改めて扱うことになろう。また、台南や大連などの地域も視野に入れなければならない。これらの作業は近代能楽史、植民地能楽史を語る作業となろう。「日本精神」「国粋」等による芸能のイデオロギー化と権力によって創られていく「伝統」の問題、学生能奨励による「日本精神」発揚の問題等々、課題は頗る多い。その先に文化権力としての能と謡の姿が見えかくれする。本稿はその初歩段階にあたり、さらなる精進と研究が要求される。



<参考文献>

- 서정완·임성모·송석원(2011) 『제국일본의 문화권력』 도서출판소화, p522~551  
 서정완(2013) 『総力戦体制下における芸能統制:能楽における技芸者証とその意味を中心に』 『외국학연구』제25집, pp193~221  
 倉田喜弘(1994) 『明治の能楽(一)』 日本芸術文化振興会 p2~p3  
 週間朝日編集部(1988) 『値段史年表 明治・大正・昭和』 朝日新聞社 p6, p13~p14  
 徐禎完·増尾伸一郎(2010) 『植民地朝鮮と帝国日本』 勉誠出版 p134~p153  
 朝鮮公論社(1917) 『在朝鮮内地人 紳士名鑑』 朝鮮公論社 p571  
 朝鮮中央經濟会(1922) 『京城市民名鑑』 朝鮮中央經濟会 p91~p92, p158, p261, p264, p318  
 三宅雪嶺(1939) 『人物論』 千倉書房 p299

접 수 일: 6월 30일

심사완료: 7월 25일

게재결정: 7월 29일

<Abstract>

### **The Cultural Power of Imperial Japan : 1910s' Noh and Utai in Seoul**

Through the Edo period, Noh was not only the entertainment but also the culture of the samurai. But Noh was forced to the verge of fatal collapse by the Meiji Restoration. The result that Edo Bakufu was dismantled by Meiji new government, Noh was fallen into a state of layoff. They had no more patrons, financial support, the stages they could play. But fortunately Noh had played a revival again as “the state entertainment” with the strong assistance of the state power. Noh was reborn as the performing arts to honor the national prestige of the Imperial Japan.

On the other hand, Utai=Yokyoku is more personal oriented entertainment to sing the vocal part of the script of the Noh play. Utai was prevalent among the upper class and middle class in Japan and other her colonies. In Seoul, before Japan annexed Korea by force in 1910, several utai-kai was established by Japanese residents. To Japanese people, Utai was the symbol of their social status and only high society people could enjoy that. But to almost all Korean people, Utai was an queer performing arts they could not understand at all. In such a situation, especially in case of Dong-wan KIM, Utai was the cultural device to promote the position of his hierarchy. Under the Japanese colonies, to become a bureaucracy to serve Japanese colonial power, it meant that socially they could stand on top of the Korean society as a power enforcer. And by mastering the Utai, when their ability of Utai exceeds the Japanese, they could stand on top of the most Japanese people culturally and mentally.

As a symbol of hierarchy, Noh and Utai had functioned as an effective device for cross-border. Here is the reason why we should pay attention to the cultural power to investigate what was the Noh and Utai under the Japanese colonial society.